

## 第2章 深まる地域経済とアジアとの関係

我が国とアジア諸国・地域<sup>14</sup>との経済関係は年々深まってきている。本章では、こうした関係が地域ベースではどのようなになっているのか、また、地域の活性化という観点からはどうすればよいのかを掘り下げてみたい。具体的には、人の動きについては「アジアから各地域にいかにかに人を呼ぶか」、物の動きについては「地域からアジアへいかにかに物を輸出するか」に焦点をあて、人や物の動きに関して、統計から現状がどうなっているのかを分析する。さらに、各地域の取組事例とあわせて考えることによって、今後、アジアとの関係を深め、地域を活性化していく上で何がポイントになるのかを探ることとする。

### 第1節 アジアとの間の人の流れ

#### 1 アジアから日本への人の流れ（概況）

##### （入国者数の動向）

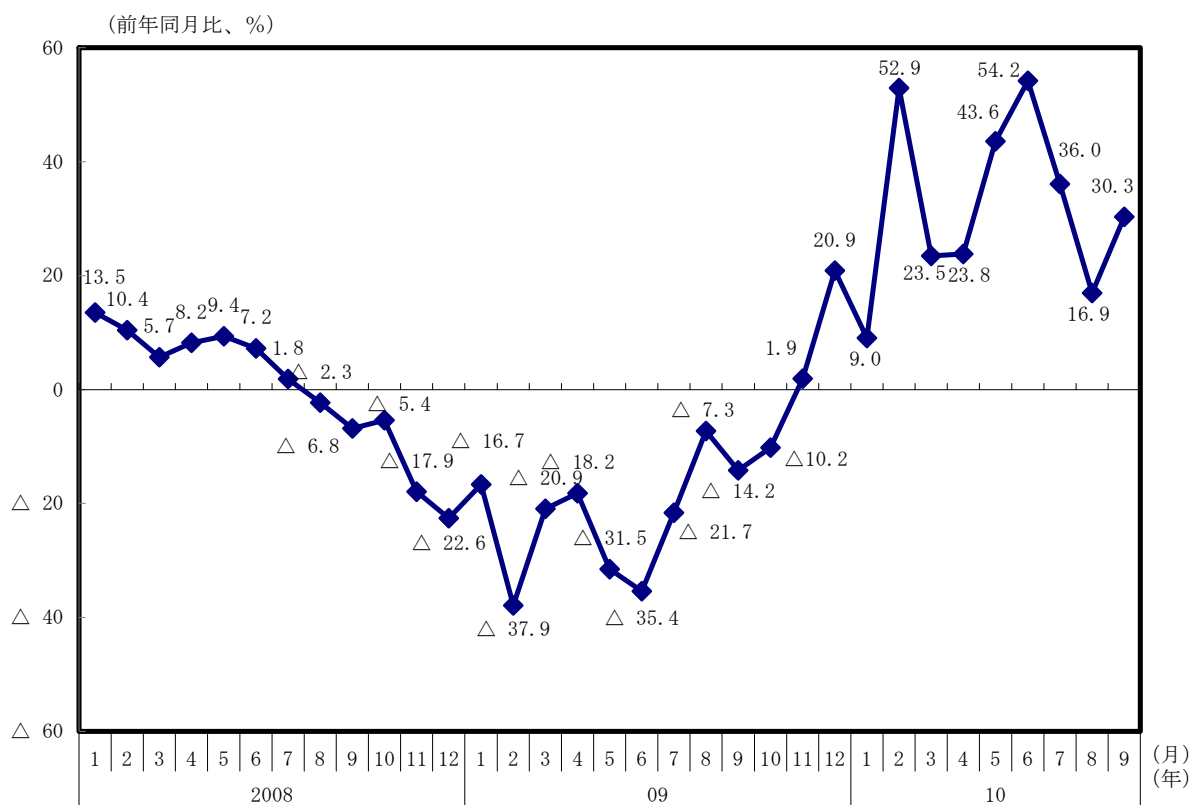
世界全体から日本への入国者の推移（前年同期比）を法務省の「出入国管理統計」でみると、リーマンショックを契機とする世界的金融危機を背景に、2008年後半より徐々に減少し始め、2009年に入っても、5～6月に新型インフルエンザが流行したこともあって前年比マイナスが続いた。しかし、2009年の後半から回復を示し、2010年に入ってから世界的な景気回復を背景に前年比で大幅な増加が続いている（第2-1-1図）。

このうち、アジアからの入国者をみると、その推移は世界全体からの入国者の推移と大きく変わらないが（第2-1-2図）、国・地域別では、2009年の夏以降、いち早くプラスに転じ、2010年に入ってから概ね堅調に推移している中国からの入国者が特徴的である。これは、中国経済が世界的な金融危機の影響からいち早く脱し、世界の中でも高い経済成長を続けていることの表れといえる。また、受入れ国としての日本の側においても、中国からの訪日観光客を増やすために、2009年7月に中国からの訪日観光客に対する個人観光ビザの発給が開始され、さらに2010年7月には、その要件が「十分な経済力を有する者」から「一定の職業上の地位及び経済力を有する者」へと緩和されている。

---

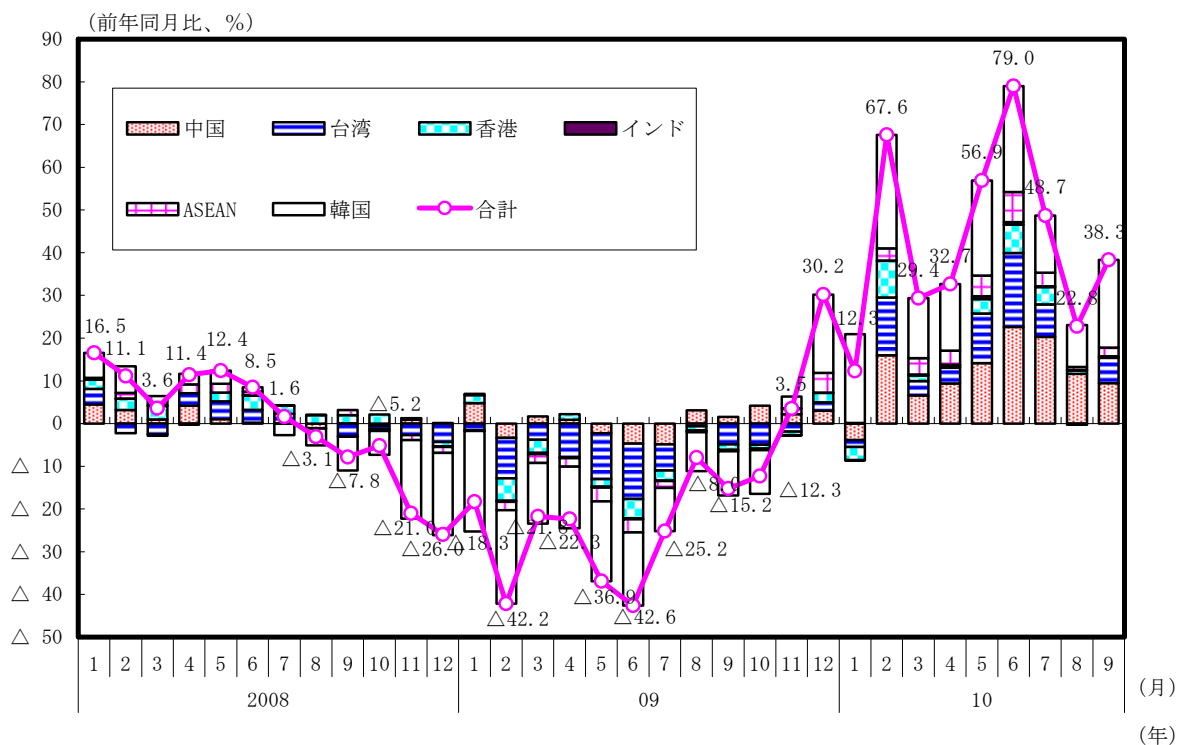
<sup>14</sup> 本報告書における「アジア」の範囲は、原則として、財務省貿易統計における「アジア圏」とする。

第2-1-1図 入国者数の推移



(備考) 法務省「出入国管理統計」より作成

第2-1-2図 アジア諸国 入国者数



(備考) 1. 法務省「入国管理統計」より作成。

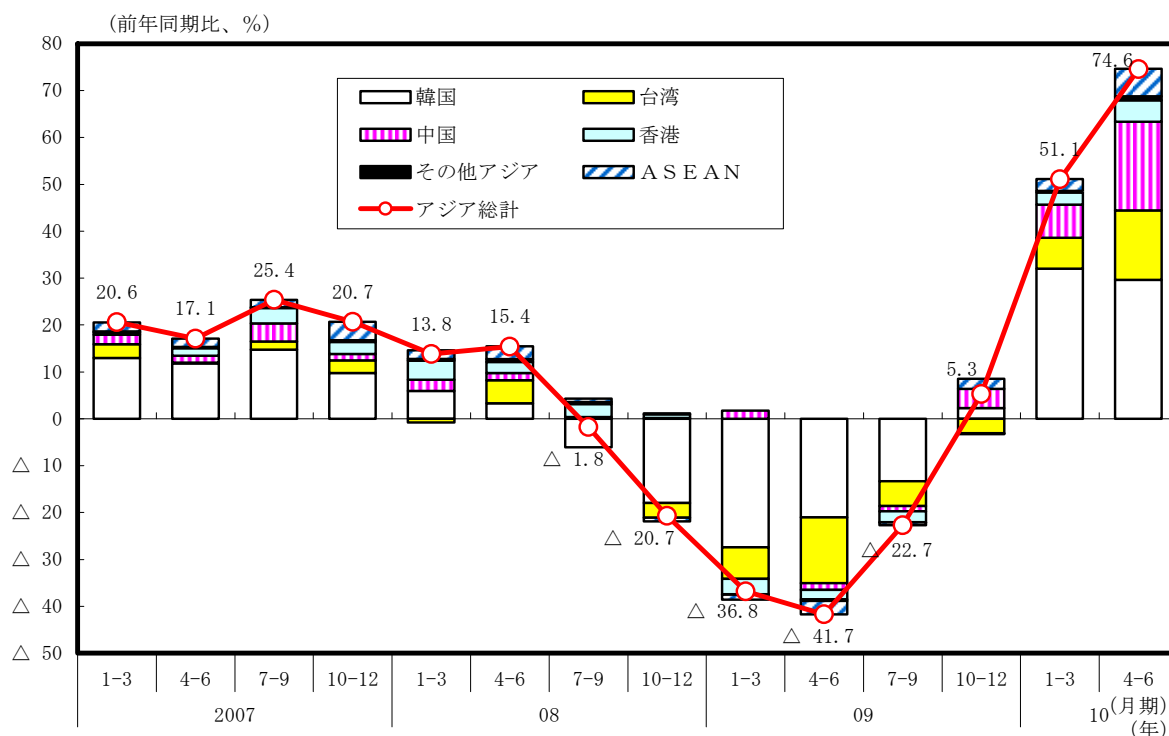
2. ASEANはミャンマー、インドネシア、マレーシア、フィリピン、タイ、シンガポール、ベトナム。

### (入国目的別の動向)

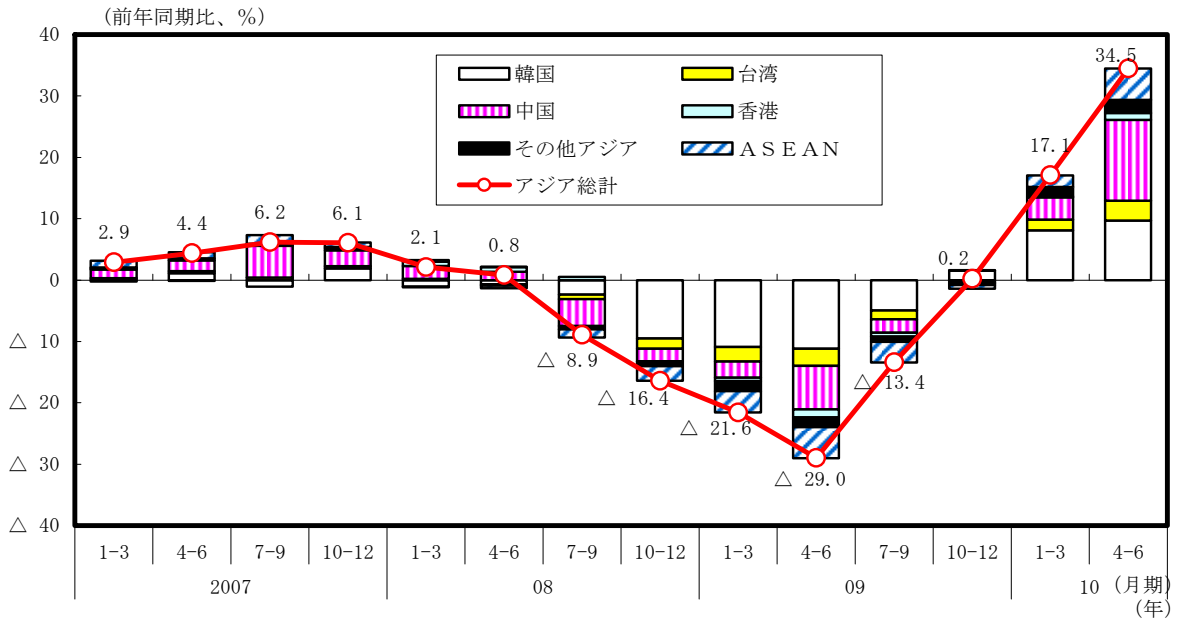
次に、アジアからの入国者の訪日目的別の動向について、日本政府観光局「訪日外客統計」によりみてみよう（第2-1-3（1）図、第2-1-3（2）図）。

観光もビジネスも2008年後半から落ち込んだ後、2009年後半から回復に転じ、2010年に入ってからは前年比で大幅増加となっている。なかでも中国からの訪日客の動向をみると、全体では前年比減少が続いている期間においても、ビジネス目的の訪日客の減少に比べ、観光目的の中国からの訪日客は減少が小幅に止まっているとの特徴がみられる。これは、ビジネス目的が景気変動の影響を受けやすいのに比べて、中国からの観光目的の訪日は景気の影響を受けにくいことを示唆している。その意味で、今後も、前述の個人観光ビザの発給開始や要件の緩和が、中国からの観光目的の訪日客を促す要因になることが期待される。

第2-1-3（1）図 アジアからの訪日観光客 前年比寄与度（四半期）  
—他の国・地域に比べて減少幅が小幅に止まる中国からの観光客—



第2-1-3 (2) 図 アジアからの訪日ビジネス客 前年比寄与度 (四半期)

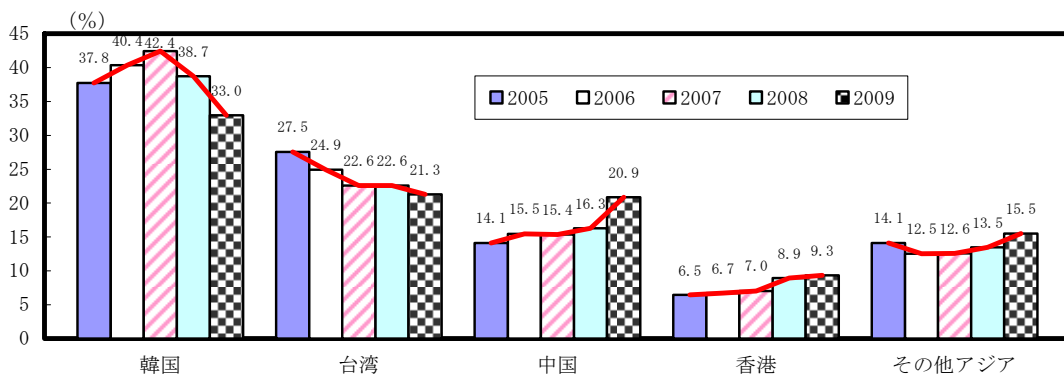


(備考) 1. JNTO「訪日外客統計」より作成  
 2. ASEANはタイ、シンガポール、インドネシア、マレーシア、フィリピン、ベトナム  
 3. その他アジアには、インド、イスラエルを含む。

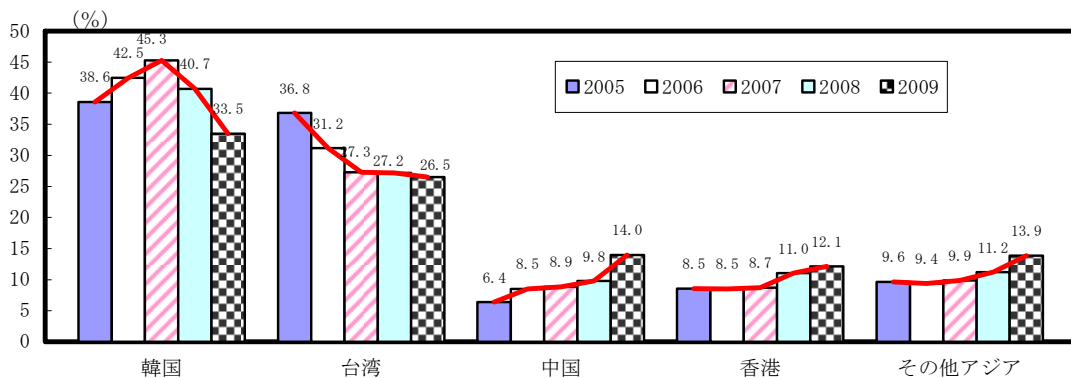
(アジアからの訪日客数の各国・地域シェア)

アジアからの訪日客のうち、韓国、台湾、中国、香港の4か国・地域からの訪日客が85%前後を占める。入国者総数で見ると、4か国・地域の中では、韓国、台湾からのシェアが中国よりも多いが、韓国、台湾がシェアを低下させている一方、中国は逆にシェアを徐々に高めてきており、2009年には20%を超え、台湾(21.3%)と肩を並べるに至っている(第2-1-4(1)図)。中国のシェアは特に観光客で高まってきており、訪日観光客のシェアでは、韓国(2009年33.5%)、台湾(2009年26.5%)と比べるとまだ低いものの、ここ5年間では2倍以上(2005年6.4%→2009年14.0%)となっている(第2-1-4(2)図)。

第2-1-4 (1) 図 訪日客シェア(入国者総数)



第2-1-4(2)図 訪日客シェア（観光客）  
—シェアを高めるアジアにおける中国からの訪日観光客—



(備考) J N T O 「訪日外客統計」より作成。

## 2 アジアから日本の各地域への人の流れ

### (宿泊旅行統計調査)

次に、日本の各地域とアジアとの間の人の流れをみてみよう。アジアから日本の各地域への人の流れを直接示す統計はないので、ここでは、観光庁の宿泊旅行統計調査を用いて、アジアのうち、特に韓国、中国、香港、台湾から各都道府県への宿泊者数を、地域別に集計したものをみる。

先にも述べたとおり、韓国、中国、香港、台湾の4か国・地域の訪日客数は、アジアからの客数の85%前後を占めている。そこで、まず、これら4か国・地域からの日本の各地域への人の流れを分析し、そこから人の流れを呼び込むためのポイントを整理することとする。

「訪日外客統計」によると、2009年のアジアからの訪日客数481.4万人のうち、観光目的は344.5万人(71.5%)と7割超を占め、ビジネス目的は72.2万人(15.0%)、それ以外(留学、短期滞在等)は64.7万人(13.4%)となっている。東京、大阪といった大都市圏では、企業が集中していることもあり、観光以外のビジネス目的等の宿泊者が一定数存在することが想定されるが、地方圏は大都市圏に比べて、観光目的の宿泊者が多いと考えられる。したがって、地方圏を含む各地域の比較をする際には、観光の観点からみることに意味があると考えられる。

観光の観点から考えることは、地域活性化を考える上でも重要である。「観光白書2010」

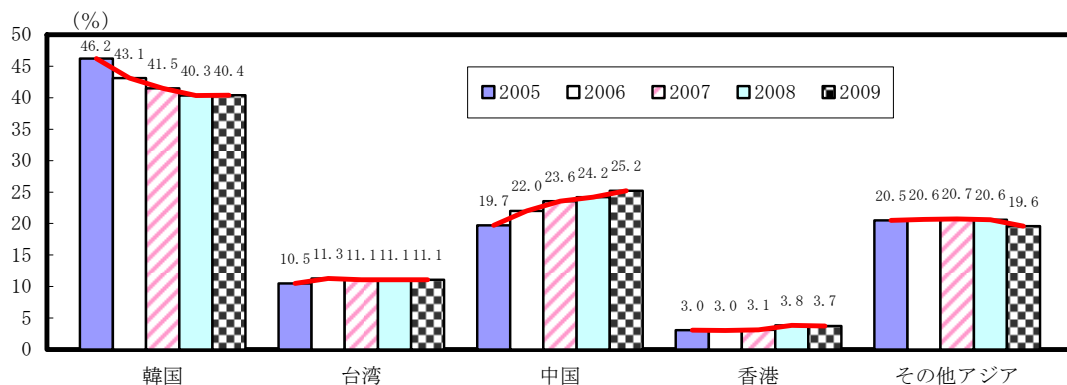
(国土交通省 2010年6月)によれば、旅行消費による生産波及効果(生産誘発係数)は1.74とされ、公共事業投資(1.96)、科学技術関連投資(1.63)、情報化投資(1.86)の生産誘発係数に匹敵するとされている。観光のもたらす経済効果は決して小さくない。

### (中国、台湾、韓国からの観光目的の特徴)

第2-1-5(1)～(3)図は、宿泊旅行統計調査を基に、2009年の都道府県別の延べ宿泊者数を地域別に集計した上で、韓国、中国、台湾、香港からの宿泊者数の中で、それぞれトップとなった国・地域別に日本の各地域をグループ分けした結果を示している。それによると、それぞれのグループごとに次のような特徴がある。

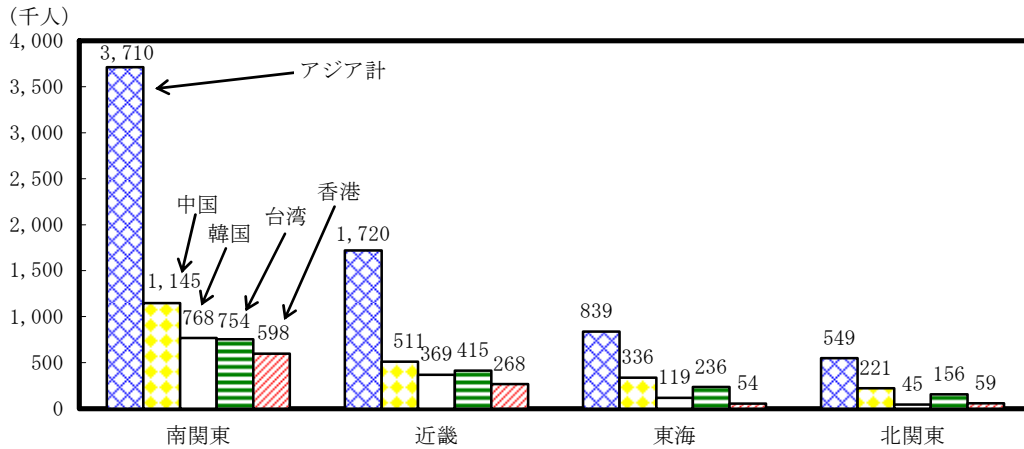
Aは中国からの宿泊者がトップのグループである(第2-1-5(1)図)。このグループは、いわば大都市圏であり、南関東、近畿、東海、北関東が含まれる。中国からの訪日客は大都市圏に宿泊するケースが他より多いということを示している。大都市圏なのでビジネス目的も含まれていると考えられるが、第2-1-4(3)図で2009年のビジネス目的の訪日客数に占める中国のシェアは、韓国に大きく差があり2番目であるにもかかわらず、地域別でトップということは、中国からの訪日客は観光目的で大都市圏に滞在することも多いと推測される。確かに、中国からの団体客による東京や大阪における電気製品等の買物ツアーはしばしば話題になっている(コラム参照)。

第2-1-4(3)図 訪日客シェア(ビジネス客)



(備考) JNTO「訪日外客統計」より作成。

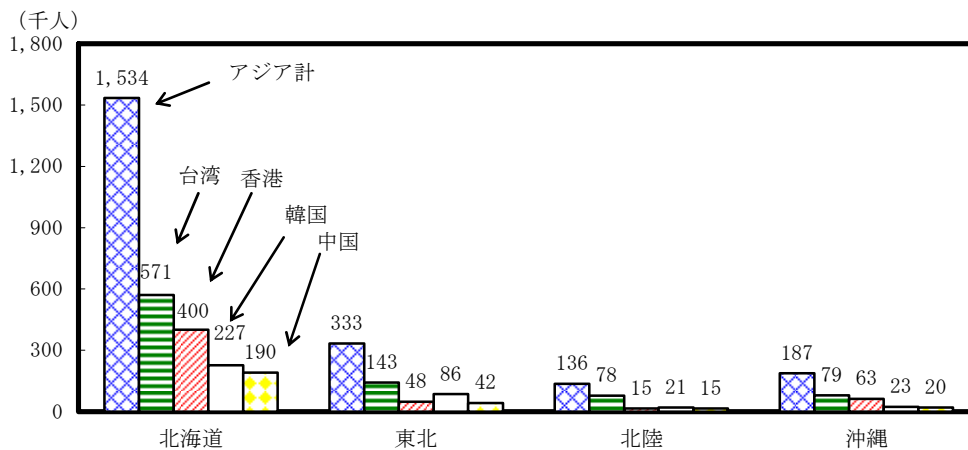
第2-1-5 (1) 図 中国からの宿泊者数がトップの地域  
—3大都市圏を含む地域—



- (備考) 1. 観光庁「宿泊旅行統計調査」より作成。  
2. アジア計には、上記4か国・地域のほか、シンガポール、タイが含まれる。

Bは台湾からの宿泊者がトップのグループである(第2-1-5(2)図)。これには、北海道、東北、北陸、沖縄が含まれる。北海道や沖縄という、スキーや海などの自然を楽しむ観光というスタイルが想定される。また、沖縄の場合は、台湾から地理的に近いことが台湾からの観光客を呼び込んでいることもあるだろう。東北、北陸についても、自然に恵まれ、温泉もあること等が魅力となっていると考えられる。

第2-1-5 (2) 図 台湾からの宿泊者数がトップの地域  
—北海道、沖縄など自然に恵まれた地域—

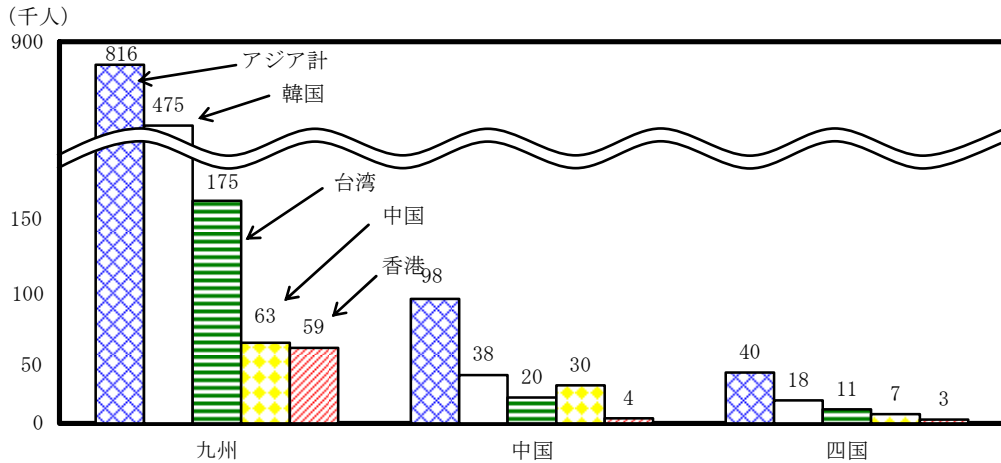


- (備考) 1. 観光庁「宿泊旅行統計調査」より作成。  
2. アジア計には、上記4か国・地域のほか、シンガポール、タイが含まれる。

Cは韓国からの宿泊者がトップのグループである(第2-1-5(3)図)。これには、

九州、中国、四国が含まれる。これらの地域については、韓国に地理的に近いという要因が大きいものと考えられる。特に九州では韓国からの宿泊客が他を圧倒して多くなっており、中でも、大分の別府温泉などが人気である。

第2-1-5(3)図 韓国からの宿泊者数がトップの地域  
—韓国から距離的に近い地域—



(備考) 1. 観光庁「宿泊旅行統計調査」より作成。  
2. アジア計には、上記4か国・地域のほか、シンガポール、タイが含まれる。

もちろん、国・地域によってパターンを固定化して考える必要はない。台湾からの訪日客でも買い物ツアーを楽しむ場合もあるだろうし、中国からの訪日客でも日本の自然に触れたいという人もいるであろう。実際、これら4か国・地域の観光目的の訪日客に事前に期待したことを挙げてもらった調査結果によると(第2-1-6表)、中国からの観光客は買物よりも温泉への期待が高いことや、香港からの観光客の約7割が買物への期待が高い。また、多くの項目で中国からの観光客の日本での観光への期待が、他の3か国・地域より高くなっている。これは、中国からの訪日客が今後も増える可能性があることを示唆している。

第2-1-6表 訪日外国人別 訪日前に期待したこと(複数回答、観光客のみ)

(単位: %)

|     | 伝統的な景観、旧跡 | 自然景観、田園風景 | 温泉   | ショッピング | 日本の食事 | テーマパーク、遊園地 | スキー  |
|-----|-----------|-----------|------|--------|-------|------------|------|
| 全体※ | 37.6      | 41.8      | 43.4 | 48.5   | 58.5  | 17.9       | 6.5  |
| 韓国  | 23.9      | 28.2      | 39.1 | 31.6   | 41.3  | 11.5       | 1.3  |
| 台湾  | 39.9      | 50.8      | 54.1 | 47.2   | 54.1  | 23.1       | 9.2  |
| 中国  | 32.0      | 50.9      | 62.0 | 54.0   | 51.2  | 27.6       | 10.2 |
| 香港  | 24.7      | 41.5      | 39.7 | 70.3   | 71.5  | 26.0       | 7.8  |

(備考) 1. JNTO「訪日外客訪問地調査2009」より。  
2. 全体は滞在期間が2日以上、90日以下の訪日客全体を指す。